



▲持ち寄られた米や避難した冷凍車の積み荷で、当面の食料を確保した。

側溝にかける金属の網蓋（グレーチング）を利用してかまどを作り、学校の調理器具を借りて、避難者たちの食事を作った。

写真提供 三浦秀一

約 600 人が避難した志津川中学校には、2011（平成 23）年 3 月 12 日の朝、内陸の入谷地区から 300 個のおにぎりが届き、避難者たちは半分ずつ分け合って食べた。

ベイサイドアリーナのある高台に運送会社のトラックが避難していた。水産会社の社長らが声がけして冷凍車の荷物を下ろしてもらい、避難所で分け合うことにした。銀ザケ、サンマ、アワビなどを志津川中学校まで運び、中学生たちも荷運びを手伝った。側溝にかける金属の網蓋（グレーチング）を利用して砂場にかまどを作り、冷凍の魚を焼いて避難者たちの食事にした。車に米を積んで避難して来た人からは米を提供してもらい、おかゆも炊いた。燃料は、みんなが裏山で取ってきた木だった。着の身着のまま逃げて来て、帰る家を失った住民たち。600 人での共同生活の始まりだった。

先生方は体育館の脇に穴を掘って板を渡し、シート囲いの仮設トイレを造ってくれた。先生方のはずばい判断と献身的な協力が住民たちを救った。

本来なら同年 3 月 12 日は、卒業式のはずだった。